
培養中

莉央沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

培養中

【Zマーク】

Z3907Z

【作者名】

莉央沙

【あらすじ】

自分自身をうつかり培養してしまった。

学校では、植バイなる授業があるのだ。
植物バイオテクノロジー一つうものだ。

この授業の前日には、注意しなければならないことがある。

その一、前日に納豆食うなつ！！

培地に納豆の菌がわっさわさはあるぞ。

その二、爪は切つて来いつ！！

貴様らの爪にはどれだけ菌があるか。

「はい。やつぱりいたよ。つめ切つてこない奴がいた」

僕は、無菌室の入り口前で先生に止められていた。うつかり爪をきつてこなつかったのだ。

「つてことで、土田が実験台に培地に爪置くことになりました。それ見て、みんなもつと爪に注意するようない。土田は無菌室に入る前にしつかり切れ」

クリーンベンチってあれだよな。

目え乾くよな。そして前にあるガラスに額がつすんがつすん当たるよな。二人がけだと隣の人気が迷惑そうにしているね。隣が僕でほんと悪かつたね。名簿順だから諦めてね。

シャーレの培地を渡された！！

これはあれかい・・・本気で爪植えろと・・・・??

人間の爪には絶対に菌がいっぱいいる物なのだ。
だから、僕のが、いっぱいはえてきたって、当たり前。うん。恥ずかしくない。うんそなんだ。

だが・・・、なんか汚いみたいで恥ずかしいっつ！！

と、いうことでー、わたくしはー勝手に70%濃度のエタノールをぶつ掛けて植えます。

火炎殺菌もしようかと思つたけど、アルコール付いた爪を火で炙る勇気は無い。

そして一時間続きの授業の後、僕の爪入りシャーレは本命のュニアスパラ試験管と微妙に隔離され24時間年中無休でクーラーが付く通称「サボるには最適部屋」に納められたのだ。

どうやら培養物と生徒の間の不等号は培養物に開けているらしい。

はいはい。そんなこんなで、一週間が経ち植バイの授業がやつて参りましたよ。

僕は友達を教室に置いてきぼりにて、一足早くバイテク実験室に駆け込みましたわけなのだよ。

白衣を引っ掛け無菌室に突入！！

後から考えたら、爪を植えたシャーレに菌が無かつたらないで、まづい気がする。

という事で、せんせーに見つかぬよう、隠密にシャーレを回収するあります。

なあに、先輩が片付けたとでも思つだらつよ。
ふはははは。

おや?
・・・・。

僕は培地をしげしげと眺めた。

三日月型をしていた白い爪は、指にはえていた居た時の様に1・5センチ程に伸びている。

なんやこら、面白。

なにこの面白現象。まさか爪の培養成功??

僕は一番隅っこにそのシャーレを隠すようにおいて、前の方にビーカーを並べた。

その日の授業は平凡に過ぎた。

ただ、操作ミスでガスバーナーが変なト「から炎を頻出させて隣の奴と馬鹿笑いしたら、出席簿で殴られた。

爪のことはすっかり忘れられていた。

二週目。

爪の内側に白っぽい、ピンク色のものが盛り上がりってきた。

納豆菌??

違うか。

先輩に、赤いのがうわあさて聞いてたから・・・。

三週目。

白ピンクっぽいものは大分膨らんでいた。
指の腹の様に見えた。

でも肌の様には見えない。

四週目。

ビーカーやら試験管やらが沢山詰まつた、棚と棚の間に、三年の学年章の付いた白衣をきた女子の先輩が寝っころがつていた。白衣とスカートのバランスが羨ましい限りに、お美しかった。さすが「サボるには最適部屋」いいもの見れました。

五週目。

先週見逃したから、ビックリするくらい育つていた。
第一間接まで出てきていた。
肌には見えないとと思っていたが、極端に日を浴びていない白い指になっていた。

六週目。

いきなり成長が早まっていた。
指の付け根まで伸びていた。
白アスパラみてえー。

七週目。

手の平の上ひょこつとまで覗いていた。

よく見ると、指紋まであらー。

僕の指と見比べて見た。

色がしつろいだけで、そっくりだつた。

僕ももう少し色白になりたいであります。

ふざけて、

「いいていー」

つてやつてみたら、シャーレから生えた指に爪を立てられた。

むかってなつたから、培地ほじくり返して指ごと生ごみに捨てた。

指は他の培養物の余と一緒に青いバケツの中に転がつてた。

シャーレはきちんと洗つて所定の場所に返した。

僕すっげー偉いわあと、洗いながら心の中で呟いた。

(後書き)

授業中にふと思つた。
葉っぱの断片が見事に生えてくるもんだから、指とか生えてきやう
だなあつて思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3907n/>

培養中

2010年10月10日01時32分発行